

南関東に於ける

土師器とその問題

坂詰秀一

一

土師器の編年的研究は、杉原莊介教授により、南関東地方を中心として行われ、前期の和泉式より中期の鬼高式を経て後期の眞向式、国分式による過程が明らかにされた。しかし、かゝる編年的研究の軸にそのこの研究も、各型式相互の概念的時差と二、三の性格の具体的認定とをのぞいては、また幾多の問題点を残さざるをえなかつた。土師器の資料が漸次増加するにしたがつて必然的にそのフランクを充填せんとする動きがあらわれてきたことは、当然のことではあるが、慶賀すべき現象と云わなくてはならない。

最近に於ける土師器の研究動向は、大別して三

の傾向を認めることが出来る。才一は、土師器研究にあたり、もつとも基礎的な問題である土師器の定義を規定せんとする動き、即ち、弥生式土器より土師器への変遷をどこに求めるかと云う問題に対する検討である。才二は、従来の研究成果である既成概念に立脚してその編年を線括的に整備し、あわせて新知見——それは主として所謂フレ和泉式土器の認定である——をつけ加え、系統的に論じているものであり、才三は、既成編年中の各型式自体の分析——主として時向差の問題——と各型式相互間に於ける発展過程の具体的認定手段として介在型式の摘出充填によつて、その展周状態を把握せんとする動きである。

土師器研究のあり方とその問題点の解明については、また多くの論議が重ねられなくてはならないであろうが、本稿に於いては、筆者の管見に於ける南関東地方に於ける土師器研究の現成果を中心として、それの近況を紹介することを主眼とし、それについて瞥見することにしたと思う。

考古学の研究に於いては、土器の研究を才一義的のものとして取扱かうことは周知の通りであるが、これは勿論、文化の展開過程を明敏にその形態に反映しているからであつて、土器の編年的研究によつて文化推移の状態を把握することが、あるていどまで可能である理由に起因している。編年的研究によつて、相対的に前後に認識された各型式は、それ自体、相應の歴史的背景をもつて出現し、更に漸次展開されたものであつて、その展開過程の各型式相互に於ける性格の相異は、外的・内的な必然的結果によつて促進されたもの以外ならぬであらう。したがつて、編年的研究の目的は、相対的前後関係の認識によつて設定された型式自体の文化現象の総合的把握とそれを生成せしめた要因、更に段階的に進展すべき必然的条件についての究明にあらねばならぬであらう。しかし、かゝる立場は、その取扱う文化の性格を

吟味検討する手続きを至ら後に適應しなくてはならないことは云うまでもないことであらう。

土師器の編年的研究は、まづ型式の認定とそれの相対的前後関係の認識とによつて開始されたが現在にあつては、それに立脚してより明確な線を描出さんとする傾向が看取される。和泉式→鹿高式→真向式→國分式と一見整然と編年されている土師器も、その上段と下段の問題は勿論、各型式相互間に於ける推移過程の具体的認定資料が、完備されているとは云えず、その文化内容もさわめて漠然としたものであると云える。土師器は弥生式土器の系統の素焼土器であるとする常識的見解よりも、問題は弥生式土器が、何故、如何なる要因によつて所謂土師器に漸移したものであるか、その歴史的背景を把握することが先決である。この問題は、土師器の定義を規定する場合のものとも重要な点である。土師器の定義については、いくつかの見解も発表され、また問題もあるが、中央集権的機構があるていど確立された期

に於ける必然的帰結の一側面として、その影響をうけてある種の規格のもとに出現した一郡の生活容器等を指すとの見方もあるが、その初現形態は、勿論全国的に斉一性を持つものではありえず、一定の機構整備とその文化内容の伸張がより全国的に顕現されて来た時期に、はじめて統一のとれた器型のセツトと文様の消失とが普遍化したと見るべきであらう。しかし、この桌についても幾多の問題点を包括していると云える。

最近、かゝる問題に密接な関係を有すると思われる所謂フレ和泉式土器の様相が漸次解明される域に達しつつある。この型式は、明の初に弥生式後期の前野町式土器と土師器前期に編年されている和泉式土器との間のヒアタスを充填するものとして注目に値するものであるが、その中間形態としての必把握されるのでは意味がなく、前野町式土器が如何なる要因に誘発されて所謂土師器なる形態を有する階梯に漸移していったものであるか、その歴史的背景を説明することこそ今後課題とされた重要な問題として留意すべきである。弥

生式土器の斉一性を有せぬ特質——土師器との相対性によつて——が顕著に認められるのは、前野町式土器ではなくして、その前階梯である弥生町式土器である。前野町式土器にあつては、ある種の規格とでも稱すべき性格が認められ、フレ和泉式土器を発生するその萌芽が既に見られるのであつて、一部の研究者が、前野町式土器をも土師器の系列中に加えたいとする予測を有することも当然のこととして理解されなくてはならないであらう。かゝる点は、生活技術の問題とも関連して、るのであつて、その背景に地域的文化的性格を認めることが必要である。一例をあけるならば、前野町式土器及び和泉式土器を出土する竪穴住居址に於ける爐の存在位置がともに中央を離れて壁面に近く位置する様になつてくるのもこの場合注意されるべき現象と云わなくてはならない。

三

和泉式→鬼高式→眞向式→国分式との編年が確立されたのは、昭和一〇年代の中葉以後で

とである。脚に窓を空けているのは前野町式土器との密接な関係を示しているものであつてその事実には台付甕形土器の存在によつても知られる。

才Ⅱ様式 東京都北見摩郡伯江町和泉遺跡出土資料を標式とする和泉式土器を本様式とした。

器形は、甕・壺・甑・鉢・杯・高杯が知られ、器壁面には八ヶの整形痕等が見られるものもある。

甕形土器は、口縁部外反し胴部は球形にしてその最大径は中位にある大形のものを中心とする。又、

口縁部と胴部との境には一条の稜が認められ、底部は小さな平底である。壺形土器は、才Ⅰ様式同様

二種類認められる。一は短い口縁部が直立し、胴部球形を呈する平底のものであり、二は口縁部

外反し、胴部楕円球形のもので、底部は平底に近い丸底のものである。而してともに小形である。

甑は、鉢形のもので底部中央に一孔を透成前に穿っているものであり、その特徴は複合口縁にある

と云える。鉢形土器は、小形のものであり口縁部

稍外反し口唇部より平底の底部にかけて浅八状に線を持っている。杯形土器は、状を呈するもの

が一般的であつて底部近くに一種の稜が見られ、高杯形土器は、杯部と脚部とを別個に作成したもので底部は浅くの場合平底である。更に杯部の口縁部と胴部とをも別に作られている。したがつて口縁部と芯部との境には稜が見られるが、これを特徴と稱してもよい。脚部は、裾で急激に広がるもの、中には杯部の底部近くにはめ込込式の滑の状態で明確に認められるものもある。

才Ⅱ様式 本様式は中期に編年されている鬼高式土器をあらわす。千葉県市川市鬼高所在遺跡を標式としているもので、その使用期間が比較的長期にわたつたため、器形の種類、甕・壺・甑・鉢・碗・盃・杯・高杯にもそれぞれ形態的相異が認められるが、こゝでは概念的にその二、三の特徴を列記するに止める。甕形土器には二つの種類が存在する。才Ⅱ様式の球形甕形土器がこの時期に至つて用途によつて分化されたわけである。その理由は竪穴住居址例より又て炉よりカマドに変化したことが知られ、それにともなつて現われた必然的現象として理解される。即ち、カマドに加

けて使用する必然的要求より球胴部が長胴部に愛化し、口縁部径と胴部最大径とが略同一になる意沸に便なる所謂長胴形の甕形土器が作成されたのである。一方、器高はさして高くない胴部最大径が口縁部径より大きく張っている平底の甕形土器が出現するが、これは貯蔵用と考えられており、生活状態がより複雑かつ合理的になったことが推察される。甕形土器は、才Ⅱ様式と同様に二類が認められる。一は口縁部外反し、くの字型を呈する頸部より球状を呈し、その胴部最大径を中位又は若干上位におくもので、底部は平底の小形土器である。二は口縁部小さく稍外反する傾向があり胴部球形にふくれて丸底の底部に稜行する小形のものである。甕形土器は、才Ⅱ様式に比較して器高は背高になり、外反する口縁部は一度頸部に直立し、胴部は又ムースに下方に向つてすまゝのていくもので、口縁部径と胴部最大径とは略同値を有する。而して底部の孔は、才Ⅱ様式のものと比較するに大きく穿つているものと底部全体をくり抜いているものとがある。甕形土器は、大別

すは二種類あるが実際にはかなりのバリエーションに富んでいる。器高は大なるものと小なるものとが認められ、口縁部も外反するもの、直立するものが存在し、頸部に一種の稜を形成しているものもある。底部は平底と丸底のものとか知られている。甕形土器は、才Ⅱ様式のものが発展したものであり、形態は略同様である。杯形土器は、大別すると二種類あり、一は口縁部直立し胴部との境は稜を認められる平底土器で、二は口縁部が若干内向するものと直立する例とがあり以下丸底又は平底の底部にゆるやかに至っているものである。しかし実際には一の場合のごとき口縁部が直立するものの外でなく、外反又は内向せるものも認められ一様ではない。高杯形土器にも二種類あると云われている。一は杯形土器と同様なる杯部に低い末左けりの八字型脚をつけているもので、二は杯形土器二に比較的背高の脚をつけているものである。而して才Ⅱ様式に鉢及び杯形土器が少量に見出されることは円柱状土製品（煮沸の際に使用される柱状土）の存在須臾器の伴出とともに留意さ

れなくてはならない。質、色調等は一定して行つた種々雑爨なるものが発見されている。

才Ⅱ様式 千葉県市川市須和田真向遺跡出土資料を標式とする真向式土器である。器形は、甕・坏・高坏等が知られているにすぎない。甕形土器は、既述様式と同様に二種類あり、一は才Ⅱ様式の煮沸用が発達したもので口縁部が部厚になり胴部もより長手なものである。二は口縁部が頸部で一度直立してより鋭く外反するもので底部小さく胴部最大径は器高の上位にあり口縁部径と略同値を示している。坏形土器は、前様式と比較して非常に浅くなり口縁部が鋭く外反し平底の底部と直結するものと、口縁部短く直立し平底に至っていないものとの二種類がある。高坏形土器は、坏形土器に脚部をつけたものであるが、脚が高くしたがつて全体的に及て大形になっているものが多い様であるが、この点については明瞭ではない。

才Ⅲ様式 一、で才Ⅱ様式と稱するのは、千葉県市川市須和田園分所在遺跡出土資料を標式とする围分式土器を指す。器形は、甕、壺、坏等が

存在するが、一般に小形のものが多い様である。甕形土器は、口縁部外反し頸部は心持ち直立するものが比較的長く認められる。而して肩は張り胴部最大径は頸部近くに位置する。底は小さな平底であつて中には小形の台付のものも存在している。壺形土器は、口縁部外反し、胴部球形を呈するもので最大径は中心位におく平底のものが近時知られた。坏形土器は逆八状を呈し平底のものが多く、外に勾合がつけられているものもよく認められる。尚、底部は系切底が支配的である。この様式の土師器の研究は、まだきわめて不十分であるが、才Ⅱ様式以前と異なり、へらを使用せず、その整形にロクロを使用していることに特徴が認められている。

以上、関東地方に於ける土師器を五様式にわけ、編年的に略述してきたが、また充分に一文化事象を適格に把握する手段としての資料が乏しいとは云えず、今後これらの編年研究は一文化階梯ごとに微に入り細を穿ちつゝ、進展することであらう。しかし土師器の研究は育一性を認識しうる一セツ

トを中心とする文化階梯の解明にあらねばならず、その相互關係の地域的特色に立脚しつゝ、進められなければならぬことは勿論であらう。かゝる要求に依じるかの様に最近進められているのが、各型式の分析的検討と各型式相互間の充填型式との認定の試みであると云えるであらう。

四

前項において瞥見せる五様式は、杉原教授の編年的研究に立脚して遂々それわけであるが、この編年を更に進めて各型を相互間のヒアタスを充填する等、より整備せんとする動きが顕現されてきたことも最近に於ける研究の一の傾向であると云える。

また前期の和泉式より中期の遼高式（才皿様式）→才皿様式へと緩行する様相をみるとき漸緩的ではなく、その間に一型式を介在させることにより、きわめてその推移過程がスムーズに把握されると云う観点より設定されたものに矢倉台式なるものがある。^(註1)この型式は、東京都杉並区矢倉

台遺跡出土資料を標式として萩原弘道氏が提唱されたもので、器形には、壺、壺、碗、甕、高坏が知られている。甕形土器は、和泉式（才皿様式）の球形の胴部を上下に引きのばしたごときもので長胴の遼高式（才皿様式）との中間形態を示している。口縁部はたゞ外反するものと一度頸部で直立してから外反するものがあり、底部は平底である。壺形土器は、和泉式に酷似するものであって口縁部と胴部が略同高を示すもの及び頸部が極度にすぼまり胴部が横に広い楕円球形を呈するものとがあり、底部は多くの場合、前者は丸底、後者は小さな平底である。碗形土器は、この形式独自の形態を呈するもので、横に広い楕円球形を横に半截せるごときものと口縁部が外反し縁をもつもの等がある。而してこの碗形土器の後者は次の遼高式土器の杯形土器に変遷するかの様である。甕形土器は、複合口縁を特徴とし胴部は直線的に下部に向つて若干すぼまることき傾向を有しつゝ、底部近くで急激にすぼまるのが顕著な特徴である。高坏形土器は、碗形土器を更に扁平に

近くしていることきもので脚部は八字型に開いて
いる比較的背高のものである。かゝる矢筈台式と
稱される一群の土器は、提唱者の主張される様に
和泉式と壺高式との中間に介在してしかるべきも
のであろう。しかし問題は、この種土器の分布状
態が現在に於いては局限されているかのごとき感
あるを否定出来ないのである。

壺高式土器（才皿様式）にあつても可成りの向
題がある。その一例を壺形土器にとつて及れば、
口縁部が鋭く外反するものと一度頸部にて直立し
てしかる後に外反するもの等があり、又胴部に張
りがあるものと張りがなく直線的にすぼまつてい
くもの等が存在しており、これは恐らく二型式以
上に分類しうる可能性が存するものではあるまい
かと思われる。

真向式土器（才皿様式）は杉原教授によつて設
定されたが、その文化内容が明確さを欠くと云う
見地よりこれに代えて、五口時雄氏は、東京都新
宿区落合遺跡出土資料を標式として落合式なる型
式名を、萩原弘道氏は、千葉県銚子市松岸遺跡出

土資料を標式として松岸式なる型式（註4）を各々提唱さ
れているが、才皿者より及るにせよこれらの各型式と
稱される一群の土器には、それそれ性格を異にす
る傾向が若干認められる。標式遺跡の所在地域と
なつていくでの附近に於いては、後期初頭の型式
として位置する妥当性が認められるであろうが、
問題は、それら一群の各型式が同一性を有しない
と云う点にあるのではなからうか。この点につい
ては地域的性格が顕著にあらわれてきた、めなの
であるのか、資料の不足であるのか、中期の壺高
式土器文化の分析によつてはじめて明確に把握さ
れるであらう。

回分式土器（才皿様式）は、資料が乏しめて限
定されており將來の新資料の増加に待つべきもの
がある。しかし現資料をもつてしても回分式は恐
らく二乃至三階様に分類するべき可能性を有して
いることを附記しなればならないのである。

五

最後にかゝる土器量の所産年代について述べな

くてはなるまい。まづⅠ様式土器は、前期古墳
 である奈良県茶臼山古墳の墳頂等より出土している
 土器型式と同様なるものであり、Ⅱ様式土器は、
 中期古墳とされている佐賀県の横田下石塚出土例
 と同形態を有している。又、本様式土器を出土す
 る竪穴住居址より滑石製の模造品が出土する例が
 あり、加ふる石製模造品は中期古墳にのみ副葬さ
 れているものである。Ⅲ様式土器は、その形態
 に須恵器の影響が顕著に着取され、又、東京都富
 士塚台遺跡より後期古墳に収められるコの字型の
 勾玉が伴出している。Ⅳ様式土器は、後期古墳
 中よりも発見されるが奈良法隆寺若草伽藍址等よ
 り出土している。^(註5)Ⅴ様式土器は、千葉県長熊原
 寺等の奈良前期前後に比定される遺跡をはじめ各
 地の国分寺址等より発見されており、その所産毎
 代が奈良時代以降にあることを察せしめるのであ
 る。

以上、きわめて簡単に南關東地方土師器研究の
 現段階に於ける成果と若干の向題点について略述
 して来たが、それを通して痛感されることは、ま
 の資料の不足と云うことであり、加ふる現段階
 的課題に充てる加のこく青年考古学協議会に土
 師器関係の無縁な人々も加結成されたことは、
 まことに遺憾あることであつて、各地に在住され
 る諸研究者の協力に期待するところ大なるもの
 がある。

(昭和三十三年二月二日稿)

(註1) 本編并は先学諸氏の業績に立脚して筆者
 が様式別に羅列分類せるものであり、先学の見
 解として代表的なものには、杉原莊介、中山淳
 子両氏『土師器』(日本考古学講座五)がある。
 (註2) 萩原弘英氏『土師式文化前期に対する一
 考察』(矢倉谷式二器の提唱) (西郊文化八)
 (註3) 玉口時雄氏(落合遺跡出土の土師器に
 いて) (後期土師器に対する一考察) (早大考
 古学研究室報告『落合』所収)
 (註4) 萩原氏『銚子市松岸町原史時代遺跡につ
 いて』(上代文化二三)、岡氏外『銚子市松岸
 遺跡の土師器』(西郊文化一四)
 (註5) 杉原、中山両氏『前掲書』